

リーグワン上位チームにおける外国人選手の起用戦略

Strategies for the Use of Foreigner Players in the Top Teams of League One

トップスポーツマネジメントコース

仁木 啓裕

研究指導教員 平田 竹男教授

【背景】

ジャパンラグビーリーグワン（以下、リーグワン）は、世界最高峰のラグビーリーグを目指し2021年に発足した。その特徴の1つが外国人制度である。外国人選手はカテゴリA、B、Cの3つに分類され、それぞれ異なる特徴を持つ。カテゴリAの外国人選手（以下、A外国人）は、日本代表としての実績または資格を有する選手であり、出場制限はない。カテゴリBの外国人選手（以下、B外国人）は将来的に日本代表資格を取得する見込みのある選手、カテゴリCの外国人選手（以下、C外国人）は他国の代表歴を持つ選手である。このうち、B外国人とC外国人の試合出場については、両者を合わせて最大4人までという制限が設けられている。

この外国人制度の下、各チームは限られた枠を活用し、競争力を高めようとしている。一方で、外国人選手の起用は年俸、付随費用などにより経営面にも影響を及ぼす。特に、A外国人は実績をもとに想定が容易だが、B外国人やC外国人は海外からの獲得となるため不確実性が高く、チーム成績や経営を左右する要因となる。さらにD1昇格、定着、優勝争いといったチームの発展段階に応じた戦略が求められる。発足から3シーズンを経た現在、各チームの外国人選手の活用を振り返ることは、チーム強化と経営の両面で意義がある。

しかし、先行研究において五郎丸（2021）は英仏米のプロラグビーリーグにおける外国人制度を調査しているものの、リーグワンの外国人選手の獲得や起用に特化した研究はこれまで行われていなかった。そこで本研究では、発足から3シーズンを経たリーグワンにおける外国人選手の活用状況を整理し、現時点における位置づけを示すことを主眼とした。

【目的】

本研究は、リーグワン各チームのカテゴリBおよびC外国人選手の獲得・起用状況を明らかにし、チームの発展段階（1部昇格、定着、優勝）に応じた外国人選手獲得方針を提示することを目的とする。

【方法】

本研究ではリーグワン上位チームをD1の1位～6位（D1上位）、D1の7位～12位（D1中下位）、D2の1位～3位（D2上位）に分類し、これらの成績区分ごとに、外国人選手（カテゴリB及びC）の獲得状況と試合出場状況を調査した。

1 外国人選手（B,C）のポジション別在籍状況

まず、2021-2022シーズンから2023-2024シーズンの3シーズンを対象に、D1上位、D1中下位、D2上位におけるB外国人およびC外国人の在籍人数を調査し、カテゴリ別、ポジション別に在籍状況を明らかにした。

2 外国人選手（B,C）のスタメンの調査

次に、同期間中のレギュラーシーズン全16節におけるスターティングメンバー（スタメン）の選手を6つのカテゴリに分類した：日本人選手（J）、日本代表経験を持つ日本人選手（JD）、カテゴリA外国人選手（A）、日本代表資格を有するカテゴリA外国人選手（AD）、カテゴリB外国人選手（B）、カテゴリC外国人選手（C）である。各カテゴリの選手の起用状況を集計し、16節を通じて最も出場比率の高いカテゴリを「主なカテゴリ」と定義した。

また、B外国人およびC外国人が主なカテゴリとなるポジションについて、該当選手の身体的特徴（身長、体重）、年齢、国籍、キャリア（過去の所属チーム）を調査し、ポジションごとの特徴と傾向を分析した。

【結果】

1. 外国人選手（B・C）の在籍状況（2021-22～2023-24年）

調査期間3シーズンで、B外国人は延べ393人、C外国人は延べ162人在籍し、平均在籍人数はD1上位でB外国人5.9人、C外国人2.9人、D1中下位でB外国人7.4人、C外国人2.8人、D2上位でB外国人6.9人、C外国人2.9人であった。

ポジション別では、B外国人はLOが最多の128人（32.6%）、次いでCTB（15.3%）とSO（10.7%）、C外国人はCTBが最多の38人（23.5%）、次いでSO（16.7%）とLO（15.4%）であった。

D1上位では、B外国人はLO（40.2%）、CTB（16.8%）、C外国人はCTB（45.5%）、LO（18.2%）が多かった。D1中下位では、B外国人はLO（32.3%）、CTB（14.3%）、SO（10.5%）、C外国人はCTB（20.0%）、FL（16.0%）が多かった。D2上位では、B外国人はLO（20.5%）、CTBとSOが各9.1%、C外国人はLOとSOが各19.2%で最多であった（表1）。

表1 B・C外国人の在籍上位5ポジション

D1上位		D1中下位		D2上位	
カテゴリB (N=107)	カテゴリC (N=66)	カテゴリB (N=133)	カテゴリC (N=50)	カテゴリB (N=88)	カテゴリC (N=26)
LO 40.2%	CTB 45.5%	LO 32.3%	CTB 20.0%	LO 20.5%	LO 19.2%
CTB 16.8%	LO 18.2%	CTB 14.3%	FL 16.0%	SO 9.1%	SO 19.2%
FL 10.3%	SO 13.6%	SO 10.5%	SO 16.0%	CTB 9.1%	FL 11.5%
PR 6.5%	FL 9.1%	WTB 9.8%	SH 12.0%	PR 6.8%	SH 11.5%
SO 6.5%	HO 4.5%	FL 6.8%	LO 10.0%	FL 6.8%	FB 11.5%

2. 外国人選手（B,C）の起用（2021-22～2023-24年）

2-1. B外国人、C外国人が主力となるポジション

D1上位チームでは、11のポジションを日本人（うち日本代表が8名）が担い、4番と5番のLOにB外国人、No.8にA外国人、13番のCTBにC外国人を配置していた。

D1中下位では日本人（日本代表選手不在）が11のポジションを担い、外国人選手は5番のLOとSOにB外国人、No.8にC外国人、12番のCTBにA外国人が起用されていた。

D2上位では、9つのポジションを日本人が担い、5番のLOにC外国人、6番のFLと12番のCTBにA外国人、No.8とFBにB外国人が配置され、13番のCTBには日本代表のA外国人が起用されていた。

表2カテゴリ別スタメン構成（2021-22～2023-24年）

	全体	D1（1～6位）	D1（7～12位）	D2（1～3位）
1：PR	J	JD	J	J
2：HO	J	JD	J	J
3：PR	J	J	J	J
4：LO	B	B	J	J
5：LO	B	B	B	C
6：FL	J	JD	J	A
7：FL	J	J	J	J
8：NO8	AD	AD	C	B
9：SH	J	JD	J	J
10：SO	J	JD	B	J
11：WTB	J	J	J	J
12：CTB	A	JD	A	A
13：CTB	J	C	J	AD
14：WTB	J	JD	J	J
15：FB	J	JD	J	B

B外国人選手がスタメンとして起用されたポジションは主に4番と5番のLO(ロック)であった。D1上位では4番・5番ともにB外国人選手であったが、D1中下位では4番が日本人、5番がB外国人となっていた。D2上位では4番が日本人、5番がC外国人であった。その他のB外国人が主力となるポジションは、D2上位のNO8、D1上位の10番(スタンドオフ)、D2上位の15番(フルバック)であった。一方、C外国人については、D1上位から下位まで共通して主力となるポジションはなかった。D1上位では13番(センター)、D1中下位ではNO8、D2上位では5番(ロック)で起用されていた。また、NO8は、D1上位が日本代表の外国人、D1中下位がC外国人、D2上位がB外国人であり、外国籍の選手が主力のポジションであった。

2-2-1 LOのB外国人選手の登録人数と獲得経路

B外国人で最も在籍人数が多いLOの選手は過去3シーズンで61いた(表3)。内訳は、スーパーラグビー経験者が34名(55.7%)で平均年齢27.4歳、各国プロリーグ経験者が11名(18.0%)27.8歳、日本の大学卒業選手が9名(14.8%)23.7歳、海外の高校・大学・クラブアカデミー出身選手が7名(11.5%)23.0歳であった。

表3 B外国人の獲得経路(N=61)

獲得方法	所属	人数(N)	人数(%)	平均年齢
移籍	スーパーラグビー	34	55.7%	27.4
	各国プロリーグ	11	18.0%	27.8
生え抜き	日本の大学	9	14.8%	23.7
	海外の高校・大学・クラブ	7	11.5%	23.0

2-2-2 LOスタメンの分析

LOのスタメン経験者は延べ59名であり、内訳はB外国人21名、日本人20名、A外国人9名、C外国人9名であった(表4)。2021-22シーズンのスタメン起用はB外国人が主だったが、2023-24シーズンはJやJDの起用が増加していた。

表4 スタメン経験者のカテゴリ別

	日本人 N=20	A外国人 N=9	B外国人 N=21	C外国人 N=9
平均身長(cm)	190.2	195.3	198.1	200.4
平均体重(kg)	107.4	113.9	115.5	121.5
平均年齢	28.8	30.8	27.1	30.7

2-3. C外国人の代表歴

D1上位でC外国人のCTBでスタメン起用された選手は対象3シーズンで8名、内訳は南ア代表3名、NZ代表3名(うち2名はフィジー代表兼任)、豪州代表1名、ウェールズ代表1名であった(表5)。全員がスーパーラグビー経験者で、その中には英国プレミアシップ経験者1名、仏国トップ14経験者2名いた。

表5 センターでスタメン経験のあるC外国人の経歴

国籍	人数	代表歴(※)		スーパー	トップ14
		出身国	他国	ラグビー	プレミアシップ
南アフリカ	3	3	-	3	プレミアシップ(1)
ニュージーランド	2	2	-	2	トップ14(1)
フィジー	2	1	NZ(1)、AUS(1)	2	トップ14(1)
ウェールズ	1	1	-	1	-

【考察】

1. 成績区分ごとのB・C外国人選手起用の特徴

B・C外国人選手の多くはLOのポジションであるが、ピッチ上4人をどのような配置にしているかは、成績区分ごとで違いがあった。D1上位チームでは、起用されている日本人11人中8人が日本代表選手で日本人選手を中心にゲーム展開しながら、B外国人がLOでセットプレーを強化し、C外国人がCTBで攻守の中核を担うことで、日本代表選手の能力を補完し、チーム全体の完成度を高める即戦力として起用されていた。

しかし、D1中下位チームでは、スタメン起用されていた11人の日本人選手は全員が日本代表経験のない日本人選手であり、5番LOやSOのB外国人が試合の基盤を支え、12番CTBのA外国人がゲームメイクを担当、No.8のC外国人は攻撃の起点となる、というような外国人選手がチーム戦力の中心、フィジカルや技術面で重要な役割を果たし、選手層の不足を補う役割として起用されていた。さらに下位のD2では、D1では見られなかったB外国人のFBへの起用など、いくつかのポジションに分散して起用されており、フィジカルと試合展開両面での役割を果たしていた。以上のように、日本人選手の層が厚いD1とまだまだ戦力不足のそれ以外では、まったく異なる起用方針があった。

2. リーグワンにおける外国人選手の貢献

リーグワン発足から3シーズンの取り組みでは、C外国人選手を中心に世界のトッププレイヤーが集まり、リーグ全体の競争力を高めていることが確認された。たとえば、D1優勝を争うトップチームには、日本代表選手に加え、スーパーラグビーやオールブラックスなどで活躍した世界的スター選手が在籍しており、リーグの競技レベルと注目度の向上に大きく貢献している。また、戦力が劣るD1中下位やD2上位のチームでも、外国人選手の効果的な活用によって上位進出を目指す可能性があり、外国人選手の存在がリーグ全体の活性化を促進していたと考えられる。

また、2021-22シーズンに比べ、23-24シーズンでは外国人選手起用割合が減り、日本人選手が起用されることが増えたポジションも出てきた。この変化は世界の一流選手と日タトレニングや試合をすることで起こったと推察される。C外国人の存在は興行だけでなくチームの強化、日本人選手の育成に貢献していることをチーム関係者は認識すべきである。

3. リーグワンの今後の展望

外国人選手の雇用は人件費の増加を伴うため、リーグワンでも外国人選手が主力を担うポジションに日本人選手が台頭することは、チーム経営においてはコストを抑えた強化だけでなく、代表強化にも繋がる点で大きな意義を持つ。日本人選手とA・B・C外国人とのフィジカルの差はまだ大きいものがあるが、LOでも日本人が起用されるようになったことをふまえると、フィジカルの要求度が高いポジションであっても日本人を育成することの意義十分にあると考える。そのためには、高校、大学でラグビーから離れていく層へのアプローチについて今後大いに検討すべきである。

かつて、Jリーグ発足当初は世界のトップ選手が多く在籍していたが、30年を経て日本人選手が中心となり、世界に選手を輩出するリーグへと成長したことを考慮すると、ラグビーにも、同様の可能性が期待される。

【結論】

リーグワン上位チームでは、B外国人は身体能力が求められるLOに起用され、C外国人は得点源や戦術の中核を担うCTBやSOでスタメン起用されていた。これらの外国人選手はリーグワンの上位チームそれぞれで重要なポジションを担い、さらにはリーグ活性化に大きく貢献していた。

一部ポジションでは外国人選手の起用が減り、日本人選手の起用割合の増加がみられた。これはLOでも見られており、フィジカルの要求度が高いポジションであっても日本人が活躍できる可能性があることを関係者は認識すべきである。

世界トップレベルC外国人は日本人選手の移行性にも貢献しており、外国人選手の活用と日本人選手の育成が同時に進むことは、クラブ経営の安定とリーグブランドの確立、リーグワンが世界最高峰のリーグへと一層の飛躍を遂げるためには不可欠な取り組みになる。